203 長崎郵趣
2023. 3. 19

鎌倉殿の13人〈Ⅳ〉

伊東弘章

承久の乱：木曽川の戦い

851-212
長崎県西
伊東弘章様

横浜金沢文庫局風景印：北条実時と称名寺

鎌倉殿の１３人〈Ⅳ〉－承久の乱からその後

伊東　弘章

「承久の乱」後，朝廷の後鳥羽上皇ら三上皇を配流した北条義時は，執権として尼将軍（姉・政子）と鎌倉幕府の執権政治を司る。しかし，義時はその3年後に死去。また姉・政子も翌1年後に死去する。その後も北条氏の執権政治は17代に亘り鎌倉幕府を継いでいくことになる。

「鎌倉殿の13人」作品はⅠ～Ⅲで終了の予定が資料等を調べている内，鎌倉8代目執権北条時宗の時代，元寇（蒙古襲来）が起きている。長崎県の対馬・壱岐・鷹島に襲来し，元寇軍が蛮行を重ねた歴史など。また私の生活域の女の都や宇久島（佐世保）が平家伝説の地だった事を知る等で，「鎌倉殿の～」〈Ⅳ〉作品へ挑戦した次第。それにしても郵趣的材料が少ないなかで，長年溜め込んでいた諸々の雑物コレクションがリーフ構成の中で役に立った。

完

○湘南に残る義経伝説： 茅ヶ崎・藤沢（神奈川）

時代を超えて愛されてきた義経のゆかりの地には様々な伝説。逸話が残り、ここ湘南（茅ヶ崎、藤沢）も例外ではありません。

平家を滅ぼした後、鎌倉入りを拒まれた源義経は、兄頼朝に切々たる思いを訴えた。
その懇願状が残る満福寺。腰越の浜で首実験された後、義経の首が境川を通り、潮着した首を洗い清めた首洗井戸。義経を祀り、義経・弁慶二基の神輿を奉じる白旗神社。「白旗大明神　神輿」と記された義経の位牌がある荘厳寺。弁慶塚の残る常光寺。
希代の勇猛と軍略を持つが故の義経の悲運とそれを支え続けた弁慶の強い絆が残る地・湘南である。

「烏帽子岩」　茅ヶ崎市のマンホール

○義経伝説の西晴海岸・義経岩 ： 高岡（富山）

平家追討に成功した直後より、源義経は兄である頼朝と対立し、やがて全国に追捕の令を出されるに至って京都より脱出、奥州藤原氏を頼って逃避行をおこなう。この時に辿った経路は諸説あるが、最も有力なものが北陸道を山伏・稚児姿で東大寺再建の勧進をおこなうと見せかけて北上したとされるものである。
それ故、石川から富山にかけてさまざまな義経伝説が残されることになる。この義経岩もその有名なものの一つに挙げられる。

女岩（左）と義経岩（右）、背後には立山連峰

越中にまで辿り着いた義経一行であるが、この海岸で急な雨に遭ってしまった。そこで弁慶が大きな岩を持ち上げ、一行が雨宿りできるようにしたというのが、この義経岩である。実際、この巨石は海岸に面した部分が大きくせり出しており、人が雨宿りをするには十分なスペースがある。また岩の頂上には義経神社が設けられている。

日本伝承大鑑

「洗脚海岸」　高岡市のマンホール

このあたりの地名である洗脚は、この義経一行の伝承に由来するものであり、地名の方が後から付けられたケースの１つである（洗脚の名称が文献に現れるのは江戸中期ということらしい）。そして現在洗脚は、海から立山連峰を臨む絶好の景観地としてもを勢せている。

5-6

●平家落人の里 ～湯西川～ ： 日 光（栃木）

「平家の里」として知られる湯西川温泉は
今からおよそ八百有余年の昔、
壇ノ浦の戦に敗れた平家は全国に逃れ落ちた。
平 忠実公は湯西川へ・・・

今でも湯西川では 追討ちの日を かすめるため、
関（とき）を告げる鶏を飼わない、
鯉のぼりを揚げないといった風習が
残っている。

●平家落人の里 ～祖谷渓谷～ ： 祖 谷（徳島）

秘境・祖谷に伝わる平家落人の伝説とは・・

平家物語では、平家は1184年壇之浦の戦いに敗れ、幼い安徳天皇は入水したことになっています。その際平清盛の孫である平教経（後に、幼名の平国盛に改名したと伝えられる）以下、平国盛と表記）も源氏の武者２人を道連れに海に飛び込みました。

しかし、祖谷に伝わる落人伝説では違っているんです。　壇ノ浦で入水したとされる安徳天皇は、実は影武者でした。平国盛は本物の安徳天皇を連れて阿讃山脈を越え、山深い祖谷へたどり着き、この地で身を伏せました。しかし、安徳天皇は高熱が原因でわずか8歳で祖谷の地にて亡くなってしまいます。国盛は悲しみ、平家再興を断念。　そのまま祖谷で暮らしました。祖谷で今でも生活をしている阿佐家は平家の子孫だという。

平家一族の哀話を秘める、秘境"祖谷"にあるかずら橋。　シラクチカズラ（重さ約６トン）で作られたもので、長さ 45m・幅 2m・水面上 14m。　昔は阿讃山脈谷地帯の唯一の交通施設であった。3年毎に架替えが行われる。（国指定重要有形民俗文化財）
平家伝説の残る「琵琶の滝」がすぐそばです。　祖谷のかずら橋を渡ってすぐに左に 50m くらい行くと、落差約 50m の滝が現れます。

祖谷かずら橋　H15.5.24

地方自治法施行 60 周年（徳島県）　JUN.2.2015

7-8

●～ひえつき節に伝わる～ 平家落人の里 ： 椎葉村（宮崎）

重文「鶴富屋敷」と那須大八郎・鶴富姫像

ひえつき節

♪遠の山嶽（スイーヤス）の木 ゆる鈴かけてヨーホイ 鈴の音ゆる時や 出ておいでやれヨー
♪那須の大八 鶴富待てて（おいて）ヨーホイ 椎葉たつ時や 目に涙ヨー
♪恋の別れの 那須大八が ヨーホイ 鶴富待てて 目に涙ヨー
♪泣いて待つより 野に出て見やれヨーホイ 野には野菊の 見盛りヨー

台切手：宮崎県の花「ハマユウ」　風景印：上椎葉局　鶴富屋敷と上椎葉ダム

平家の残党がようやくたどりついたのが山深き椎葉だった。しかし、この隠れ里も落人狩りにおわれ、那須与一宗高が追討に向かうよう命令される。が、義経のため、代わって弟の那須大八郎宗久が追討の命を・・・椎葉に向かった大八郎、険しい道を越え、隠れ住んでいた落人を発見。かつての栄華をよそに、ひっそりと農耕をやりながら暮らす平家一門の姿を見て、哀れに思い追討を断念。幕府には討伐を果たした旨を報告。普通ならここで任務に戻るところだろうが、大八郎は屋敷を構え、この地にとどまったのです。そればかりか、平家の守り神である厳島神社を建てたり、農耕の手助けなど、協力し合いながら暮らしたという。

やがて、平清盛の末裔である鶴富姫との出会いが待っていました。・・・

「みやざき」鶴富屋敷　1989 観光記念タバコ

「みやざき」ひえつき節　1981 観光記念タバコ

● 平家落人伝説の里 ～五家荘～ ： 八代市泉（熊本）

"九州の秘境"とも呼ばれる「五家荘（ごかのしょう）」は、九州中央山地の険峻な山々に囲まれた場所にある。
壇ノ浦の戦いに敗れた平家が逃げ延びて里を作ったという"平家落人伝説"が残るこの地は、今では紅葉や新緑の絶景スポットとして知られている。

五家荘があるのは、熊本市から 50km ほど南下した山間部。　九州中央山地の奥地にあたり、標高 1,300～1,700m 級の山々が連なる中に民家がポツポツと点在しています。人が住むにはあまりにも厳しい環境で、まさに秘境の中の秘境。人里離れたこの秘境の地は、平家の子孫や菅原道真の子が逃れてきた隠れ里であるといわれています。平家の子孫が椎原（しいばら）、久連子（くれこ）、葉木（はぎ）の3地区、そして菅原家の子孫が仁田尾（にたお）、椎木（もみき）の2地区に住んだといわれ、合わせて5つの住居があったことから「五家荘」という地名になったという。

梅の木轟公園吊り橋　2009. 6.20

梅の木轟公園吊り橋

五家荘には、スリル満点の吊橋や轟音を響かせる滝など、観光スポットが点在している。険しい渓谷を行き交うため、住民の生活にも欠かせない吊橋だが、ここには滝を鑑賞するために設置された観光用の吊橋がある。五家荘には名称の最後に"轟（とどろ）"と付く滝が多いが、これは五家荘の音響でそのまま"滝"を意味する。いずれの轟も紅葉の名所として名高く、吊橋の上から望む山々の紅葉と滝が織りなす風景は、まるで錦絵のようだ。

ふるさと絵葉書「五家荘」

昇龍滝　2009. 6.20

9-10

●平家落人と所縁の地・長崎 ～ ：宇久島（佐世保）・女の都（長崎）

「平家の里・宇久島」野方海岸　（デレカ）

平家盛公
宇久島上陸の像

1187年壇ノ浦の戦いに敗れた平家盛（清盛の孫）が安住の地を求めて辿り着いた島という言い伝えが残っており、島内には平家盛以上陸地とされる大慈崎（舟かくし）をはじめ、当時を物語る史跡や文化財が多く残されています。

国道沿に浮び大慈崎・大慈崎　（デレカ）

大慈崎から見る宇久島の夕日

平安時代後期、源氏と平家が争い、敗れた平家一族の残党が逃げ延びたという平家伝説が残る女の都。「女の都」は『ゆだ』（めんと）という音楽がなまってできたといわれる。『ゆだ』には『踊り子』、『門』には『出入り口をふさぐ』という意味があり、源氏の追っ手を避けたという意味合いがあると考えられるという説と、「この地域には女性しかいない」と答え、平家女性が源氏と言い合ったことから"女の都"に変化した説もある。

源氏と渡り合った伝説の地・女の都

切切手：切手趣味週間「龍上の花」　風景印：女の都局　アジサイ、通上水源地

◆モンゴル帝国 ～元～ ： 蒙古（モンゴル）

1,260 万平方キロメートル。何を意味する数字かと言えば、これはチンギス＝ハン（ジンギス・カン）が作りあげたモンゴル帝国が征服した領土の総面積とされる数字である。
その広さときたら、アレクサンダー大王、ナポレオン、ヒトラーなども遠く及ばない。東は太平洋から西はカスピ海までを支配下に置いた、まさに世界最大の帝国。その軍勢もまさに最強。残酷かつ精強な騎馬兵の集団はユーラシア大陸を席巻した。

日本・モンゴル外交関係樹立 30 年
2002

モンゴル帝国は、初代のチンギス＝ハン以来、5代にわたって繁栄。チンギスの孫・フビライ＝ハンは 1264 年に国号を「元」と改めた。それから 10 年後の 1274 年、ついに日本へと、魔の手を伸ばしてきたのである。

「チンギス・ハン」
台湾

モンゴル

「チンギス・ハン」
モンゴル（日本での初印）

11-12

◆○元寇ゆかりの日本三大八幡宮 ～筥崎宮～ ： 福岡市

「敵国降伏」筥崎宮の朱印

筥崎宮は、宇佐、石清水両宮とともに日本三大八幡宮に数えられている。古伝によると、921（延喜21）年に八幡大神の託宣があり、応神天皇を主祭神として筑前、穂波の大分宮より遷座し、外敵退散、武運長久の神として、玄界灘を眼前博多湾岸に鎮座したと伝えられています。鎌倉時代の元寇（蒙古襲来）の折には、亀山上皇が外敵退散を祈願し、神門に敵国降伏の扁額が掲げられたと言います。後世になってからは足利尊氏、大内義弘、豊臣秀吉、小早川隆景などの名だたる武将が武運長久を祈願し、筥崎宮は隆盛を持っています。

筥崎宮楼門　2017.5.20

「敵国降伏」の額面は本宮に伝存する第一の神宝であり縦横に金泥で鮮やかに書かれています。縦、横約80センチ、全部で三十七葉あります。1274年、蒙古襲来による社殿の再興にあたり亀山上皇が納めた御宸筆を文禄年間、筑前領主小早川隆景が楼門を造営した時に、御宸筆を模写拡大して門に掲げているという。

◆○元寇（蒙古襲来）～ 文永の役 ～ ： 肥前（対馬・壱岐）

元寇とは、日本の鎌倉時代中期の1274年・1281年に、当時モンゴル高原及び中国大陸を中心領域として東アジアと北アジアを支配していたモンゴル帝国および その傘下である高麗によって2度にわたり行われた対日侵攻の呼称である。1度目を文永の役、2度目を弘安の役という。蒙古襲来とも。特に2度目の弘安の役において日本へ派遣された艦隊は、当時世界最大規模の艦隊であった。

1268（文永5年）、第1回目の元の使者が太宰府に到着し、元への服属を示唆する国書を手渡します。当時の八代目執権・北条時宗は、18歳と若いながらも剛毅果敢（ごうたんかえい）。これを拒否し、国内には時局の重大性を知らせました。　時宗は、その後も執拗にわたる元からの使者を追い返し、当時鎌倉幕府の侵入の危険性が最も大きい博多・松浦沿岸に異国警固番役（いこくけいごばんやく）を置き、九州一円の武将が防備を固めました。1274（文永11）年10月5日、元軍は対馬を手始めに、壱岐、松浦の順番で殺戮を繰り返しながら侵攻してきた。その数、兵3万、軍船900といわれている。

～ 元寇の前哨戦、対馬・小茂田浜 ～

小茂田浜は、鎌倉時代には「佐須浦」と呼ばれ、元寇の舞台として、元・高麗連合軍数万と宗家が戦った古戦場。鎌倉幕府に忠誠を誓う宗家は、わずか80余騎で、この小茂田浜でも・高麗軍に真っ向勝負を挑み、宗家一族のほとんどが戦死したという。

対馬から望む龍山の夜景　・　朝鮮通信使行列（対馬アリラン祭）

オウゴン・オニユリ

台切手：壱岐・対馬国定公園（浅茅湾と対州馬と豆酘崎）　風景印：郵便局　郵便局風景

13-14

～ 元寇の古戦場・壱岐 ～

1274（文永11）年10月3日、高麗を出発した2万5千の元軍（蒙古軍・高麗軍）を乗せた900隻の船団は、10月5日に対馬を襲うと、14日には壱岐へと侵攻。夕方、島の北西部にある瀋海（うろみ）、馬場元、天ヶ原の海岸から上陸。元軍を迎え撃ったのが、壱岐の守護代を務めていた平景隆（たいらのかげたか）です。景隆は居城である樋詰城（ひのつめじょう）からおよそ100騎の家臣を従えて出陣すると、庄の三郎ヶ城前の唐人原（とうじんばる）で元軍と激突。約400人の元軍と対峙した景隆らは多勢に劣勢もあって退却を余儀なくされ、樋詰城まで引き揚げましたが、翌15日には平銭から元軍に取り囲まれて総攻撃を受け全滅した。

壱岐郵写：少弐資時像 →

壱岐では、文永の役で大宰府守護を務めた少弐資貞の嫡子で、弱冠19歳の少弐資時（しょうにすけとき）が守護代に命じられ、樋ノ口城（ふたのくちじょう）に入って元軍の襲来に備えます。
少弐氏は代々、北九州の守護を司る大名少弐（だざい）のしょうこ）という役職を世せつかる名家で、資時も文永の役では、12歳で博多に上陸した元軍に向かって一番名のりをあげ、矢合わせをしたという勇敢な若武者です

鬼瓦

1281年の弘安の役で戦死した少弐資時を祭る神社です。1928年以来、壱岐の島民たちはお祭神奉賛会の事業を進め、1944年に本殿を建立、そして1948年に御祭神3柱（亀山天皇・菅宇多天皇・少弐資時）の鎮座祭を挙行したそうです。その後、1952年に壱岐国総神社の鎮座祭を挙行、さらに1956年に湊郷神社から壱岐出身の英雄を分霊し現在に至るそうです

◆○元寇（蒙古襲来）～ 弘安の役 ～ ： 筑前（博多）

1274（文永11）年10月20日、元・高麗の蒙古軍は博多湾に上陸。博多から箱崎を攻略して、日本軍の本拠地である大宰府を一挙に占領しようとする。だが、日本軍の反撃にてこずる。時宗は来襲に備え、九州各地の沿岸に防塁（ぼうるい）を築き、さらに兵を広く募って軍備を強化していた。その上、蒙古の情報を収集しながら、対抗するための武器作りも行っていく。
限られた時間の中で、対馬、壱岐での惨状を聞いたことも、対策を練るうえで役立ったことは言うまでもない。

福岡 百道（大平洋博が開催された）

国宝「金印」　志賀島で発見される

ウメと太宰府天満宮

福岡西局：
生の松原と防塁、能古島

中世の博多は商都であり、貿易一港湾都市として栄えた商人。彼らは貿易のまちづくりを見て文化・文物を日本へ持ち帰り、貿易をモデルに商売の平和原を築きました。そして大宰府は、大陸からの使節を迎えるまちとして整備されていきました。日本の西の玄関口となった大宰府は、使節を迎えるため様々な建築物、道路、城などが造られ国際都市として整備された一方、大陸からの敵の襲来に備えて、当時の国家プロジェクトとして巨大な防塁・水城が築かれました。

15-16